

## Learner-Centered Model としての LA (Learning Assistant) システムの導入

池口 佳子<sup>1)</sup> 五十嵐 ゆかり<sup>1)</sup> 三浦 友理子<sup>1)</sup> 奥 裕美<sup>1)</sup> 宇都宮 明美<sup>1)</sup>  
 櫻井 文乃<sup>2)</sup> 高田 幸江<sup>1)</sup> 高橋 奈津子<sup>1)</sup> 松本 文奈<sup>1)</sup> 林 直子<sup>1)</sup>

### The Learner Centered Model—Learning Assistant Induction

Yoshiko IKEGUCHI<sup>1)</sup> Yukari IGARASHI<sup>1)</sup> Yuriko MIURA<sup>1)</sup> Hiromi OKU<sup>1)</sup>  
 Akemi UTSUNOMIYA<sup>1)</sup> Fumino SAKURAI<sup>2)</sup> Yukie TAKADA<sup>1)</sup>  
 Natsuko TAKAHASHI<sup>1)</sup> Ayana MATSUMOTO<sup>1)</sup> Naoko HAYASHI<sup>1)</sup>

#### [Abstract]

This is a summary of “Introduction of the Learning Assistant System as a Learner-Centered Model.” Learning assistant (LA) was adopted as a practice during 2015 to push forward education reforms at this institute while using the distinctive features of a nursing school. The aim of this project is to establish the LA system within the Institute so that experienced students can, with training, learn to help junior students learn in a Learner-Centered Model, and in effect, accelerate active learning.

The four steps needed to move the Institute forward are :

1. Get feedback from faculty by way of a questionnaire
2. Activate the LA program in the college curriculum, by firstly : providing students with the necessary know-how before clinical practice, and secondly : hold a positive practice exercise during an acute care process.
3. Hold a workshop in LA comprehension
4. Review LA practice with Kansai University and inspect other LA users.

Both LA students and learners experienced the LA model positively. However, some issues were pointed out :

1. The employment of experienced students for LA, and how LA is managed
2. LA's place in the education system
3. Spreading the word about LA inside the institute.

We will continue to study the best LA system that fulfills the needs of Nursing in particular for adoption at our institute.

**[Key words]** Learner-Centered Model, learning assistant (LA), active learning

#### [要旨]

2015年度聖路加国際大学（以下、本学）の教育改革推進事業として採択された『Learner-Centered Model としての LA の導入』について報告する。本プロジェクトの目的は、看護学部の特徴を生かした、実習を体験した上級生が下級生の学習支援を行う LA (Learning Assistant) システムを構築し、Learner-Centered

1) 聖路加国際大学看護学部看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science  
 2) 元 聖路加国際大学看護学部看護学研究科・Formerly, St. Luke's International University, Graduate School of Nursing Science

Model (学習者中心モデル) としてアクティブ・ラーニングの促進を図ることである。活動内容は、①教職員アンケート、②LA を活用した学部教育 (臨地実習前技術指導・急性期実践方法看護過程演習)、③LA ワークショップ、④関西大学LA 演習およびLA 外部研修視察、である。

活動の結果、学習者・LA 学生双方より肯定的な意見が聞かれた。しかし同時に、①LA 雇用・管理システム、②教育体制、③学内周知に関する課題が明らかとなった。今後は、看護系大学ならではのLA システムの構築に向けて検討を続けていく必要がある。

〔キーワード〕 Learner-Centered Model, ラーニングアシスタント (LA), アクティブ・ラーニング

## I. はじめに

2015年度聖路加国際大学 (以下、本学) の教育改革推進事業として展開した『Learner-Centered Model としてのLA の導入』について、その成果と課題を報告する。本プロジェクトの目的は、看護学部の特徴を生かし、実習を体験した上級生が下級生の学習支援を行うLA (Learning Assistant) システムを構築し、Learner-Centered Model (学習者中心モデル) として、より学習者の学習意欲を向上し、主体的に学習に取り組むアクティブ・ラーニングの促進を図ることである。

学部学生を大学が雇用し、教育的配慮の下に教育補助業務を担い、学部教育におけるきめ細かい指導の実現を図ることを目的とするSA (student assistant) 制度は、2000年に文部科学省から出された「大学における学生生活の充実方策について」<sup>1)</sup>という報告書に基づき、創設された。このSA 制度において、科目を既習した学部生が下級生の学習支援を行うLA システムが構築され、国内の多くの大学で教育的試みが行われている。海外においても、Learner-Centered Model として Undergraduate Teaching Assistants (UTA) として学部学生を教育補助者とする取り組みが各大学で行われている。学術的実践

をモデル化し、Peer Mentor として学部学生が初年度の学生達を支援するシステムの取り組み<sup>2)</sup>や、学習者とともにUTA 学生にも学習姿勢やチームビルディング・教育力の向上に対して、非常に高い効果があるとし、看護基礎教育における画期的なシステムであるとの報告もみられている<sup>3)</sup>。しかし、日本の看護基礎教育における取り組みの報告例はみられていない。

そのため本プロジェクトにおいては、看護系大学の特色を生かし、実習を終えたLA (4年生) が下級生 (学習者) の目線に近い立場で、知識や技術を臨床に適用する方法や学習するプロセスを支援することを試みた。そのことにより、①LA が身近なロールモデルとなり学習者の学習への動機づけが高まり、学習意欲が向上する、②LA にとっても、実習を振り返り学習支援を行う体験は、看護専門職としての教育力を高めることにつながることを期待した (図1)。また、プロジェクトの取り組みを通して、①学内にLA システムの周知を図る、②LA システム構築に向けた課題の明確化、③本学におけるLA システムの可能性を探る、④研修を通して他大学の取り組みを学び、LA への教育方法を検討することなどを目的に事業を展開した。

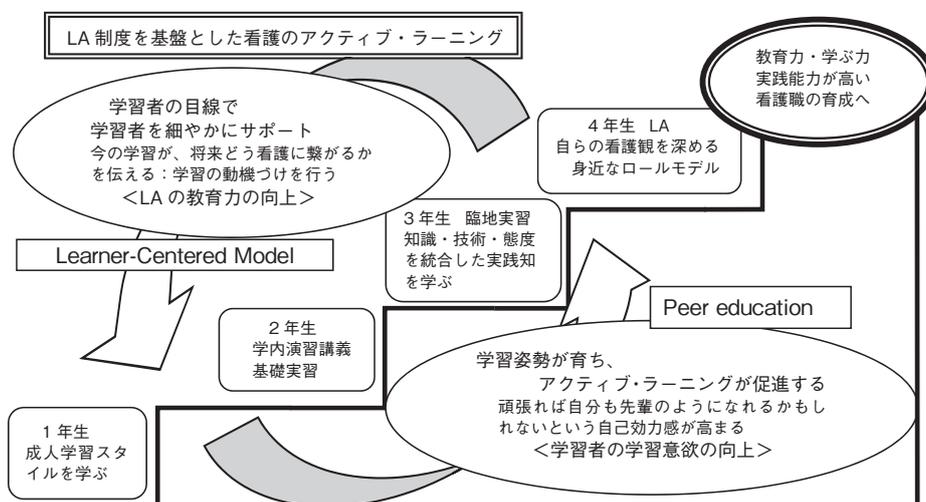


図1 LA プロジェクトイメージ図

## II. 活動報告

### 1. 8月 事前教職員アンケート実施 51名回答

【結果】LAについて知っていたものは26名（51%）であった。LAを導入した場合、『学習者にとってLAが身近なロールモデルとなり、学習意欲が高まる』『先輩とのつながりができる』、またLAへの効果として『ロールモデル役割を担うことで、上級者としての自覚が強まる』『体験や知識を改めて下級生に語ることで今までの学習の意味づけができる』という肯定的な意見が得られた。また、『教育内容に学生の意見を反映しやすくなる』といった学習効果への期待もみられた。しかし、その反面、『LAから学習者に誤った情報を提供される可能性がある』『LAが学習者に変な先入観を与えないようLAのルール作りが必要』など、導入に際しては注意が必要であるという意見もみられた。

### 2. LA登録17名

4年生に対して、LAに関する説明と募集を行ったところ、17名の応募があり、LA（正式なLA雇用制度がないため、人事課と相談の上、稟議を回しアルバイトとして時給1000円で雇用）契約を行った。

### 3. 学部3年生臨地実習前技術演習指導：血糖採血演習

【担当教員：高田・高橋・松本】

1) 9月3・4日13～15時 アーツルーム

2) 参加者：3年生（自由参加）67名・LA2名

3) 目的：成人看護学実習（慢性期）で実施頻度の高い看護技術である血糖測定の方法、注意点を再確認するとともに、血糖測定の一連の流れを模擬患者（LA）に実施することで血糖測定の安全・安楽な実施や採血場面でのコミュニケーションについて考えることができる。

4) 教員による演習に向けた事前準備

①3年生：manabaで演習資料（目的、演習方法、手順、LA演習を通して学んでほしい点、測定器具使用方法）を提示

②LA：LA用演習資料に加え、指導のポイントや配慮してほしい点を説明し、学生の緊張感への配慮（一連の流れを見守る感じで）・血糖値、症状のアセスメントの確認・フィードバックを依頼し、同時に実施のコツ、工夫点などのアドバイスを説明し依頼した。

③実習支援員（中溝先生）に演習の協力依頼・説明をし、実際の穿刺時の確認をお願いした。

5) 実施

①自分の指で実際に血糖測定を実施する。

②場面：昼食前の血糖測定を想定し、血糖測定の一連の流れを、LAを対象に行う。物品の準備から、挨拶～退室までを実施。\*実際の穿刺は、LAには行わない。

### 6) 終了時アンケート結果【一部抜粋】

①学習者3年生：51名回答

『教員よりも緊張せず、ささいなことも質問しやすい』『友達とやるよりも緊張感があってよい』『実習の様子も聞くことができ、不安が軽減した』『実際の場面をイメージできた』と肯定的な意見が聞かれた。

### 4. 学部2年生 急性期実践方法 周術期看護過程演習

【担当教員：池口・宇都宮・櫻井】

1) 10月～11月講義室および演習室9コマ13.5時間

2) 参加者：2年生101名（履修生）、LA14名

3) 目的：大腸がんにより開腹手術を受けた患者の事例分析を通して、術後健康状態が急激に変化する患者の状態を多角的に理解すると共に、看護問題の抽出と早期離床を促すための具体的な計画立案までを系統的に考える能力を養う。

上記の演習目的を達成するために、臨床体験が少ない学習者に対して、実際に急性期実習を修了したLAがファシリテーターとして演習に参加した。LAが学習者に近い視点で学習を支援し、今学習していることが1年後の実習にどのように繋がっていくのかを学習者がイメージでき、演習に主体的に取り組むことを期待した。

4) 教員による演習に向けた事前準備

①2年生：演習要項をmanabaで事前配信し、説明時にLAシステムの目的とLAを紹介した。

②LA：LAの目的とファシリテーター役割のミニレクチャーを行い、演習計画の段階から打ち合わせを開始し、既習学生としての意見を取り入れながら演習計画を構築した。LA用の要項を作成し説明するとともに、看護過程の事例を実際にLAが展開した上で、どこで学習者がつまづきやすいのかを検討した。

5) 実施：初回説明時にLAから学習者に、実際の急性期実習での体験を語ってもらった。14のグループを作成し、各グループに一人のLAが加わる形でグループワークと全体演習を行った。教員はラウンドしながら全体を統括し、途中でLAを集めて進行状況を確認し、演習前と後に教員とLA全員で各グループの進捗状況と課題について、意見交換しながら教員が支援する形で進めた。

### 6) 終了時アンケート結果【一部抜粋】

①学習者2年生：90名回答

『先輩たちの実習を通じて学んだことを聞いて、机上だけではわからないことも考慮した展開が行えた』『参考になるテキストやどのように学んでいくのか実際のお話を聞いて、ある程度のイメージを持ちながら取り組めた』『私達の知識では思いつかなかったことも、実際に病棟で患者さんを受け持たれた経験をもとにした豊富な知識でアドバイスやヒントをいただけて、グループワークの活性化につながった』などの意見が聞かれた。肯定的な意見



写真1 関西大学 LA との意見交流会

が多かったが、一部『答えを教えてもらえない LA がいる意味はあるのか』といった意見もみられた。

## 5. LA ワークショップ開催

- 1) 11月12日
- 2) 参加者：LA および本学教職員・院生など35名
- 3) 関西大学の教育学三浦真琴教授と実際に LA として活躍している関西大学学部生2名による、ワークショップを開催した。LA 学生のファシリテーターによるグループワークを体験し、ワークショップ後に LA 学生同士の交流会を行った。参加した LA から、『LA は学生の持っている力を引き出すために働きかけをすれば良いと学んだ』『どこまで教えればいいのかという疑問について、実際の体験を交えて意見をいただくことができた。看護学のなかで学ぶコミュニケーションの技法も LA として学生に介入するために活用できると感じた』などの感想が聞かれ、他大学の LA 学生の主体的な姿勢に多くの刺激を得た体験となった。

## 6. 関西大学視察

- 1) 12月3日
- 2) 参加者【教員：五十嵐・池口】
- 3) 目的：LA 活動の実際とそれを支援しているサポートシステムの実際を知る。
- 4) 関西大学における LA 体制：三者（教員、職員、学生）協働型アクティブ・ラーニングのプログラムにおいて LA 体制を2009年から構築している。また2009年のスタート時には LA は12名、クラスも12であったが、2015年には LA 108名、クラスも85と増え、LA と授業を行うことが定着してきている。
- 5) 研修内容：LA が運営している科目を見学し、その後特に LA の育成方法、科目受講学生への LA 導入の理解を得るための方法などについて、意見交換を行った。また、事務局や環境なども見学し、雇用費用、LA のためのスペースの確保とその運用について意見交換を行った。総合大学ならではの科目構成の中での授業運営や教

員の支援の実際、リフレクションシートなど LA の自主性を尊重した支援体制とそれ支える事務局運営の重要性について学ぶことができた。

## 7. 外部機関による LA 学生への研修会参加

- 1) 12月12・13日
- 2) 参加者【教員：三浦】
- 3) 目的：他大学の LA 学生のための研修会に参加し、LA 学生への教育的支援の実際を知る。
- 4) 研修内容：「自己の探求」というテーマのプログラムが行われた。当初、LA として支援する学習者の自己の探求を支援するノウハウを身につけることを目的としていたが、LA 自身に「自己の気づき」を促す効果があり、研修内容が変容していったということである。プログラムは外部機関のファシリテーターによって行われ、関西大学等2大学の LA 30名程度が参加していた。バラエティに富んだ楽しさのあるワークから、自分が価値をおいていること、コミュニケーションの傾向を学ぶことができる内容となっていた。今回の視察から、学生が LA を行う経験には、自己の対人関係に関する特性と向き合う機会が多くあることに気づかされた。支援するための具体的方法を伝えることと同時に、LA が自己を磨くことを支援する視点も必要であることを学ぶことができた。

## 8. 本プロジェクトの事業報告および検討会

- 1) 2016年2月22日活動報告・検討会
  - 2) 参加者：プロジェクトメンバーおよび学内教職員19名
- 2015年度の活動報告と今後の課題について検討を行った。今年度の活動を踏まえ、LA システムの学内への周知や事務局も含めたシステム化に向けた課題の確認、本学ならではの LA システムの可能性について、意見交換を行った。その後、プロジェクト内で今後の事業の方向性について検討を行った。

## Ⅲ. LA システム導入により、期待される効果と課題

実習を終えた4年生を LA として下級生の演習や講義に導入したところ、学習者より肯定的な意見が多くみられた。また、学年を超えた縦のつながりができたことも評価できる。

活動後の LA 学生へのアンケートでは、『復習になった。もう一度事例を学び、考え直して知識の再確認や思い出す機会となった。ファシリテートする難しさを学んだ』『2年生にどのように助言、介入見守りをすればグループワークを円滑にできるか、サポートの仕方についても勉強になった』『縦のつながりができ、うれしかった』などの肯定的な意見が多く聞かれ、卒業後新人看護

師となって教えられる立場になったときや後輩に関わる  
ときにも役立つとの意見もあった。しかし、その一方、  
LA への支援に対して、『上手くファシリテートするた  
めに、ファシリテートするための知識・方法・技術の準備  
が必要だと思った』『LA とは何か、何を目的としてどの  
ように支援すべきなのかを、LA 学生と教員が理解する。  
LA をやってみて悩んだので、LA の困ったことや悩みを  
共有する場を設ける』などの意見もみられた。

## 1. LA システムにより期待される効果

### 【学習者にとって】

- 実習を経験した LA の存在は、学習者である下級生にと  
って『臨床をイメージしやすくする』『親しみやすく質  
問しやすい』『学生の立場を理解してくれる』存在とな  
り、より効果的な学習に繋がる。
- LA が実習体験を伝えることで、実習への不安の軽減  
に繋がる
- 今学習している座学が、今後の実習にどのように繋  
がるかがわかり主体的な学習が進む。
- LA が身近なロールモデルとなる。

### 【LA にとって】

- かつて既習した学習内容をファシリテートすることで、  
実習体験も含めた復習にもなる。
- 学習支援をすることによって、学習者の目線を意識し  
たり、教える側の目線で学習プロセスを体験すること  
ができる。生涯学習能力・専門職者としての教育力にも  
繋がる。

### 【教員にとって】

- 学習者の目線になった演習計画や教育プログラムの開  
発に繋がる。
- LA が学習者を支援することをサポートする役割を通  
して、教育システムへの示唆を得ることができる。

### 【大学にとって】

- LA の意見を反映することで、大学全体が学ぶ場とし  
て、学習者を主体とした教育システムの構築を考える機  
会となる。
- LA システムを構築することで、教員と職員とが協働  
で LA サポートを通じて学習支援を行う機会となる。

## 2. LA システム導入に向けた課題

LA 学生の導入実施と研修を通じた LA システムに関  
する学習の機会を創設することができた。しかし LA  
のシステム化に向けては課題や検討事項が残されている。

① LA 学生の個人差もあり、研修やサポート体制を整  
える必要がある。2015年度は、教育改革推進事業とし  
て、実習を終えた4年生に公募を行い、全員を雇した。  
しかし、費用や質の担保の問題もあり、今後どのよう  
な募集の仕方や研修の必要性があるかについて、検討する

必要がある。

➡ TA (Teaching Assistant) 制度との連動やファシリ  
テーター役割を学ぶ研修会の実施など、学内で教育力を  
高める機会を設けてはどうか。今回研修や視察を行った  
教員が研修会を行うことも検討する。

②看護系大学という過密なスケジュールにおいて、効  
果的な LA システムの構築を図るためには大学内に周知  
を図り、学生支援センターとの連携も検討する。

➡ LA システムのルール作り（雇用体制・応募・条件  
など）

③2015年度は成人領域で導入を行ったが、他の領域で  
の可能性を検討する必要がある。LA 学生の意見として、  
実習に関することなど講義・演習以外での活用も検討し  
ていく。

➡領域単位で活動するのは限界があるため、どこが主  
体となって推進していくかを検討する必要がある。今回  
のプロジェクトにおいて、実際に LA 活動を行った領域  
は、成人領域（慢性期および急性期）のみであった。全  
学的な取り組みにしていくためには領域を超えたシステ  
ムの構築が求められる。そのためには、教員のみではな  
く、TA のように教育システムに組み込むようなシステ  
ム化が必須である。

## IV. おわりに

今回のプロジェクトに参加した LA 学生からは活動を  
体験して、聖路加国際大学ならではの LA 活動が期待で  
きるのではないかという意見が聞かれた。『実習がどんな  
ものか語るワークショップ。実習に対する学生の不安を  
もとに、実際そのような事例をテーマにグループワーク  
をしてもらい、最後に実習を経験した学生が体験を語る  
時間を設ける』『座学の段階から LA として入ってから、  
演習に臨むことができればもっと時間をかけて Assist が  
できる』『国試対策、国試を受けるにあたって有用だった  
参考書の紹介など』『基礎で導入する。1年生のうちから  
LA と関わる機会を持つ』など、自分たちの本学での 4  
年間の体験をもとにアイデアが広がりをみせた。

すべての実現は難しいとは思いますが、本学の学生たちが  
自分たちで自らの大学教育への更なる期待を込めてアイ  
ディアを出してくれたことに、LA システムの意義があ  
ると考える。意欲的な LA 学生の自主性を尊重しつつ、  
学習者となる学生たちへ、その姿勢を見せることが何よ  
りも本学の財産になりうるのではないだろうか。LA 活  
動を受けた学習者へのアンケートには、「4年生になった  
ときに LA として下級生の学習支援をやってみたく思  
いますか」という項目を入れている。5～6割の学生が、  
『自分の学びにもなるので、ぜひやってみたい』『後輩の  
役に立ちたい』と答えている。残りのわからない・やり

たかないと答えた学生たちが理由として書いたことは『今は自信がない』『どうなっているのか、想像がつかない』という内容であった。当然、今の2～3年生の段階で4年次に後輩指導ができるかを予測することは困難である。それであっても、半数以上の学生がLAをしてくれた先輩のように後輩の役に立ちたいと答えてくれたこの精神が、本学に脈々と続いている縦のネットワークに繋がっており、本学の更なる活性化に結びつくことを期待したい。

最後に、教育改革推進事業として温かく見守ってくださった井部俊子前学長、懐深く教育の魅力を伝えてくださった関西大学の三浦真琴教授、そしてプロジェクトに参加して下さった教職員、学生の皆様に深く感謝申し上げます。

#### 引用文献

- 1) 文部省高等教育局医学教育課審議会報告書(2000年6月):大学における学生生活の充実方策について-学生の立場に立った大学づくりを目指して-:文部科学省ホームページ. [参照2016-11-19].  
URL.[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/012/toushin/000601.htm).
- 2) Henry P, Dempster M, Gordon J. Undergraduate teaching assistants: a learner-centered model for enhancing student engagement in the first-year experience. *International Journal of Teaching and Learning in Higher Education*. 2013; 25(1): 103-9.
- 3) Herrman JW, Waterhouse JK. Benefits of using undergraduate teaching assistants throughout a baccalaureate nursing curriculum. *J Nurs Educ*. 2010; 49(2): 72-7.